

Title	おとぎ話の鏡像としての”Balin and Balan” : Idylls of the King 考察
Author(s)	服部, 慶子
Citation	Osaka Literary Review. 23 P.92-P.103
Issue Date	1984-12-20
Text Version	publisher
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25638">https://doi.org/10.18910/25638</a>
DOI	10.18910/25638
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# おとぎ話の鏡像としての “Balin and Balan”

— *Idylls of the King* 考察

服 部 慶 子

Arthur 王にまつわる物語は中世以来、Thomas Malory を始めとする数多くの詩人によって書かれてきた。18世紀の古典主義時代にはあまり顧みられなかったが、Victoria 朝時代になって再び脚光を浴びた。Tennyson, Arnold, Swinburne らによって次々と作品化されていき、また Pre-Raphaelite の画家が好んで主題にして描いた。本稿では Tennyson の *Idylls of the King* をとりあげ、その12の物語のうちの“Balin and Balan”を考察してみたいと思う。

*Idylls of the King* はその長さの点においても Tennyson の大作だと言える。彼は長年にわたってその作品を手がけ、およそ50年もの間 Arthur 王物語に関与した。しかしながら彼の Arthur 王物語集に対する評価は分かれており、彼が短い叙情詩において発揮することのできた手腕が作品の長さ由の冗慢さによって消されてしまったと手厳しく批判する批評家もいる。しかしこの作品集に賭けた Tennyson の並々ならぬ意欲は無視できないし、また古くから親しまれてきた Arthur 王物語に Tennyson 独特の味がどのように加えられているかを探ることは興味深いと思われる。

Tennyson は *Idylls of the King* を書くにあたって、主に Malory の *Le Morte d'Arthur* に準拠し、他にも1838年に英訳された *Mabinogion* を随時参考にしているが、それに加えて Tennyson 自身の言う“the fashion of the day”つまり、当世風味付がされている。その特色のひとつは超現実的な事柄をなるべく廃し、現実に近いものとして Arthur 王を描いていることである。また、Arthur 王を理想の人物として高く掲げ、厳しい倫理で他の人物を裁いている。そういう特色を念頭に置きながら“Balin and Balan”

を論じてみたいと思う。

“Balin and Balan”は双子の兄弟の物語であり、*Le Morte d'Arthur*のBook IIを準拠にはしているが、筋立ては大部分 Tennyson 独自のものである。彼はまず口述で散文に組み立て、<sup>1)</sup>その後、韻文に書き改めた。Tennyson の特色を際立たせる為に Malory の話を比較参考にしてみると、主な登場人物と結末は Malory から借用しているが、場面の設定、事件の起こし方は Tennyson の独創によっている。まずその構造を分析して展開の仕方を検討しよう。

## I

双子の兄 Balin は Arthur 王の宮廷内で起こした暴力沙汰の為に “the Savage” とあだなをつけられて兄弟共々 Camelot から追放されていたのだが、王の怒りが解けて再び宮廷に迎え入れられる。その後、弟 Balan が悪鬼退治に出ていき Balin 一人が宮廷で騎士 Lancelot の威厳の高さに感服する毎日を送る。ところが Lancelot と王妃 Guinevere が恋人同志であることを発見し、そのショックの為に、宮廷を飛び出し Balan の後を追う。途中 Pellam 王の城で殺傷事件を起こし、次には魔女 Vivien に騙され、その嘘に激怒した声を近くに居合わせた Balan が悪鬼のものと勘違いして切りかかってゆき、お互い傷つけ合って死ぬ。

以上が大まかな筋であるが、ここで Balin と Balan が双子であるということから、双子若しくは二人の兄弟にまつわる話が多く存在するおとぎ話の構造と比較してみると、ある関連性に気付く。おとぎ話は数限りなくあるが、双子の物語はある決まった一定の型にはまって進められている。例えば双子若しくは同年で同じ身分の兄弟がいるとすれば、冒険を求めて世間に出て行った片割れが魔法にかけられてしまい、それを家に残って平和に暮らすもう一方の片割れが魔法を破って助け出してめでたく終わるという話の型なのである。

そういうおとぎ話の型との関連性を追求する為に、グリム童話の中の「黄

金の子どもたち」を例に挙げて“Balin and Balan”と比較してみよう。話の内容をかいつまんでみると、ある男が川の中で黄金の魚を捕まえ、それを埋めた地面から二つの金の百合が生え、男の妻は二人の金の子どもを産む。成長した二人の兄弟は世間に出てゆくが、一人は途中で引き返して父と共に暮らす。出て行ったもう一人は結婚するが、やがて森に狩りに行き、そこで出会った魔女によって石に変えられてしまう。家に残った片割れは庭の金の百合の一本が突然倒れるのを見て、もう一方の身に変事が起きたことを悟って救出にのりだす。そして魔法を解いて助け出すのである。

上の話と比べてみると“Balin and Balan”の話は丁度逆の進み方をしていくことがわかる。初めは一緒にいた二人が、Balanが悪鬼退治に出ていくことで離れる。ここまでは同じ型を踏んでいる。ところが「黄金の子どもたち」とは逆に、冒険に出ていった Balan は物語の最後まで姿を見せず、残った Balin について話が進むのである。宮廷で平和に暮らすはずの Balin は尊敬する Lancelot と王妃との不義密通の場面を目の当たりにして逃げ出す。そして、彼が救うはずである片割 Balan と出会って、happy ending を迎えず、それどころか相討ちになって二人とも死ぬのである。

この話の筋は、グリム童話の裏返しであることがわかるが、何故裏返しになったかを考える前に、この二つの話に共通して存在しているように思われるある象徴に言及しながら、話の筋を少し詳しく追ってみよう。

まず、題からもわかるように「黄金の子どもたち」では「金」が一貫して話に係わっている。黄金の魚が現われて物語が始まり、金の百合、金の子どもたち、おまけに子どもらは金の馬に乗って出かけてゆく。そして、金であることを笑われたせいで、一方は家に引き返すのである。一方、“Balin and Balan”では盾の紋章が事件の鍵を握っている。最初 Balin は自分の野蠻さを抑制する為に、敬愛する王妃 Guinevere の王冠の紋章を自分の盾に入れたいと申し出る。快く承諾した Arthur 王は次のように述べる。

“The crown is but the shadow of the King,  
And this is a shadow’s shadow, let him have it,  
So this will help him of his violences!”

(“Balin and Balan”, 199-201)

紋章は、王の影である王冠の影にすぎないと笑う王に対して Balin は、影でなく光を与えてくれと頼む。そして自分の内に潜む荒々しさを王冠の紋章によって封じ込めるのである。時に宮廷の *courtesy* の高さに耐えられなくなりながらも Balin は懸命に努力するのであるが、王妃の密通に近い場面を目撃して、その努力は崩れ去る。そうすると先程引用した王の言葉が皮肉となって響いてくる。紋章の持つ力は、それが王の影の影である為に脆く消え、それを Balin は光だと思っていた為に光は消え、逆に闇となるのである。

宮廷を出た Balin は、以前二人でいた場所を見て、彼と一緒にいた方が良くはなかったかと自問する。“Was I not better there with him?” (*Ibid.*, 287) そこで片割れの Balan との同化を目指して森に入って行く。途中立ち寄った Pellam 王の城で、Invisible knight である Garlon に、王妃の姦通にも気付かずに王冠の紋章を盾につけている間抜け者と嘲笑われ、それが元で Garlon を打ち倒して城を追われる。Balin は災の元となった王冠の紋章入りの盾を捨て、“the Savage” に戻って森で暮らす決心をする。そこに通りかかった魔女 Vivien は、Balin に護衛を頼んで断われ、その腹いせに、王妃が Lancelot をわが王と呼んでいたと嘘をつく。それを聞いて激怒した Balin は、一度捨てた盾を叩き割る。そこへ Balan が来て争った後、死ぬのであるが、死ぬ前にお互いを認め、盾がないために Balin を見分けられなかったことを Balan が嘆く。

そのような訳で、金が原因で別れた二人が、最後には幸せを与えられるグリム童話とは逆に、Balin と Balan は王冠の紋章入りの盾が原因で命を落とす。金が幸福を象徴するおとぎ話とは違って、盾の紋章は王妃の姦通を象徴している。そして面白いことに、Malory の物語を参照すると、

そこでは、Balan が Balin を見分け損なったのは、Balin がある騎士の勧めで自分の盾と取り替えていたからということになっており、<sup>2)</sup>また、紋章の話は出てこない。即ち紋章の象徴は Tennyson の独創なのである。そして、この紋章は、金のような単純な象徴でなく、二つの相反する象徴の意味がある。つまり、Balin が更生の為に助けを借りようとした紋章は、模範となるべき Arthur 王の徳を象徴するはずであった。ところが王妃が不貞を働いていたために、実は道徳の腐敗を象徴していたのであった。この紋章の象徴に裏切られて Balin と Balan は破滅するのである。ここにも、おとぎ話とは違った逆転が見られる。

さて、これまでに、“Balin and Balan” がおとぎ話と裏返った展開をし、また幸福を約束すべき盾の紋章の象徴に裏切りがあったことを見てきたが、ここで、Jung の弟子であり、おとぎ話を心理学的に分析している M.L.von Franz の説を参考にしてみよう。彼女の説によると、おとぎ話に登場する双子の兄弟は一つの自我であって、お互いがお互いの影である。<sup>3)</sup>冒険の途中で魔法にかけられた片割れを家に残った片割れが救出してめでたく話が終わるのは、自我が分裂して葛藤した結果、再び結びつくことだと説明されている。つまり、二つに分かれた自我の一方が外で他の者（例えば魔女）に出会って葛藤にまきこまれて一旦は敗北し（例えば石にされる）、それに気づいたもう一方が救いに行って葛藤が解決するというのである。

ここで例に挙げた「黄金の子どもたち」の場合は、Franz の説明に沿った展開をしている。しかし、その話とは逆の展開をする“Balin and Balan”にあてはめてみるとどうということになるだろうか。Franz の論法でゆけば、Balin は自分の影である Balan と一旦は別れ、葛藤を経て savage から gentle な者へと移行した後に再び Balan と同化するはずである。Balin の場合、野蛮さを王冠の紋章によって封じこめることは、石に変えられるのに匹敵する程の葛藤であった。ところが、その紋章に裏切りがあった為に宮廷を去り、ひいては王冠の紋章入りの盾を割ることによって Balan と相討ちとなって自滅する。従って自我の葛藤という点から見ても、おとぎ話

とは逆の現象が起きているのである。

以上のことを考慮に入れると、“Balin and Balan”が従来のおとぎ話とは逆の型になっている理由は王冠の紋章にあると考えられる。Balinは、その紋章の表わす Arthur 王の理性や徳を相手にしたはずが、王妃の官能と不道徳に直面させられた結果、命を奪われるという悲劇的結末を迎え、おとぎ話の裏返しとなるのである。

## II

次に Balin の破滅の起因となった王冠の紋章の象徴するもの、即ち王の徳と王妃の不道徳が同居する Camelot の宮廷について考えてみよう。

Balin にとっては Arthur 王の高潔さと王妃の不徳は表と裏の関係にあったが、宮廷内ではこの二つが対立関係にある。ここで目を転じて *Idylls of the King* 全体を眺めてみると、王妃 Guinevere の姦通があたかも Camelot 滅亡の原因であるかのように書かれており、Arthur 王の理想の世界である Camelot は王妃の官能に食い荒されて崩壊していくのである。言い換えれば、Arthur 王の理性が王妃の官能と対立した結果敗北して Camelot は滅びるのである。その二人を比べてみると、この物語集の本来の主人公である Arthur 王は全体を通じて登場場面が少なく、その完璧な性格の為か存在感の薄いものとなっている。反対に、不道徳な王妃がかえって生々しいセリフを吐き人間的でさえある。そこで王妃の言動を追求してみよう。彼女と Arthur 王との関係はどうなっているだろうか。

Balin が気高いと信じていた王妃は、実は間違った情熱に身を任せて憚らない女であった。王妃の恋人 Lancelot は、夢の中で、暗闇に白い百合を持って立つ聖女のあまりの眩しさと汚れのなさに心を打たれ、罪の意識に戦いて、翌朝は王妃の顔を正視できない。その訳を聞いた王妃は、眼の前に咲き乱れる薔薇の方が美しいと答える。純潔の百合よりも燃えたつ情熱の薔薇を好むのである。そのような二人の会話を耳にしたことで Balin は破滅へと追いやられる。また別の箇所、王妃は Lancelot に向って、次

の引用のように、Arthur を評して嘲る。

She broke into a little scornful laugh :  
 “Arthur, my lord, Arthur, the faultless King,  
 That passionate perfection, my good lord —  
 But who can gaze upon the Sun in heaven?”  
 .....

“A moral child without the craft to rule,  
 Else had he not lost me . . .”

(“Lancelot and Elaine”, 120-123 & 145-146)

Arthur 王が高潔すぎてついて行けないと非難し、また自分の官能を高らかに誇る王妃の姿が顔前に迫ってきて王の存在を圧倒しているかのように見え、その破壊的な力は Lancelot を墮落させるばかりでなく、居合わせた Balin の死をも招き、ひいては Camelot を崩壊させるのである。

このような官能と理性の対立は Tennyson の他の作品の中にも見られる。“Lucretius” は、学問に没頭するローマの哲学者 Lucretius が、夫の心を自分に向けようと躍起になった妻に媚薬を飲まされて見る夢を描いたものである。Venus やトロイの Helen を始め、次々と現われる美女の群に Lucretius は淫らな思いをかきたてられる。最初は自分の信じる理性の力で抑えようとするが、高度の理論も役には立たない。そして、遂に欲情の前に平伏する姿が次の引用である。

But now it seems some unseen monster lays  
 His vast and filthy hands upon my will,  
 Wrenching it backward into his; and spoils  
 My bliss in being.

(“Lucretius”, 219-222)

目覚めた彼は自責の念に耐えられず自殺する。ここでも理性が官能と戦って苦しみ、負けて死に追いやられるのである。

Tennyson の作品以外にも、同時代に理性と官能の分裂と対立を描いた作品がある。Stevenson の Jekyll 博士の場合である。Jekyll は自分の内に



潜む享楽主義を長い間隠したまま生活を送る。ある日、邪悪な別の自分に変身する薬を発明し、自己の善悪二つの要素の分離に成功する。それまでは、次の引用のように相反する二つの意識の闘争に苦悶していた。

It was the curse of mankind... —that in the agonised womb of consciousness these polar twins should be continuously struggling.<sup>4)</sup>

その苦悩を断ち切るべく自己を二分したのであった。切り離された悪の分身 Hyde は淫らな肉感の解放を楽しむ。しかし、Hyde が徐々に魂の支配権を握っていく。その挙句 Jekyll に戻ることが困難になり、最後には Jekyll は自殺を謀る。

Jekyll も Lucretius も官能との闘いに敗北するのだが、この問題を *Idylls of the King* の中に戻してみよう。Tennyson は、早逝した親友 Hallam の姿を理想の人物である Arthur 王に重ねてこの物語集を書いたと言われている。しかし Arthur 王の支配する Camelot は始めから減びるべき運命を背負っており、聖杯探求を初め、諸々の騎士達が織りなす様々の事件はみな Camelot の衰退に繋がっていく。その大きな原因は、先に見た通り王妃の官能と不貞なのであるが、その際作者 Tennyson は、厳しい眼で王妃を非難している。また不倫の恋に陥る Tristram と Iseult にも厳しい仕打ちを加え、悲恋物語の美しい主人公であるという従来の二人のイメージとはかけ離れたものに仕立て上げている。

物語の中では優位に立って勝利を取める官能性を Tennyson は手厳しく批判している。そして注目すべきことは、Tennyson が王妃の登場場面をわざわざ増やしているという事実である。例えば、Malory による Balin と Balan の物語では王妃の浮気のことと言及されておらず、勿論王冠の紋章は存在していないが、どういう経緯で Tennyson は王妃と Lancelot の密通場面を増やして殊更強調するという改変の手を加えるに至ったのであろうか。

桂冠詩人として社会の良識を代表するという気概に燃えて詩作に励んだ Tennyson の自負の現われの当然の結果としての姦通批判には納得させら

れる。Tennyson の言う“the fashion of the day”に、当時の Victoria 朝社会の厳しい倫理と道徳が反映されていると考えられるであろう。実際、*Idylls of the king* に対する大衆の評価は二つに分かれていたが、あまりに道徳的すぎるといふ非難の声が上がる一方、当世風道徳に適った傑作だと賛美する声が幅をきかせていた。けれども、Tennyson の Arthur 王物語が果たしてそれ程までに道徳的であるのかということには疑問を感じる。前述のように、作者によって弾劾されているはずの王妃の姿がかえって強烈な印象を与えているからである。

そのような Tennyson の姿勢を論じるのに、当時の社会背景を抜きにしては考えられないであろう。良識と道徳に支えられて限りなく繁栄するかに見えた Victoria 朝社会は徐々に decadence の翳りに覆われていた。表面は健全な社会と平和な家庭を取り繕いながら内部は少しずつ腐敗していたのである。特に、厳格すぎる倫理と道徳は反動を産み出す可能性を秘めていた。Freud の言葉を借りるならば、「人間は、社会がその文化的理想を守るために彼に課した禁圧の尺度に耐えられないゆえに神経症になる」<sup>5)</sup>という現象であり、過度の抑制が神経症を惹き起こし、続いて反動が現われるのである。その傾向は Tennyson の態度にも見られる。王妃 Guinevere をわざわざ矢面に立たせて厳しく批判するのも神経症の現われだとみなすことができる。また彼の作品中の Lucretins は、官能を侮蔑して、その存在を認めなかった結果、無意識の世界である夢によって復讐を受けるのである。

Tennyson の作品だけでなく、Jekyll 博士も自己の内部で相争う理性と官能の共存を否定し、分離せしめた為に命を失う。そして同時代に書かれた作品の主人公 Dorian Gray も似た症状を呈している。彼の場合、肖像画によって自己が分離し、本人が享楽生活のみを堪能する間、その頹廢の付けを全て肖像画が引き受けている。そこには抑えるべき理性の姿はもはやなく、最後に Dorian が、醜く変わり果てた自分の肖像画にナイフを突き立てた瞬間に逆転が起って自分の胸にナイフが刺さって Dorian は死ぬ。

これらの症状を統合してみると、何れの主人公も、抑圧によって自己の内部で対立する二つの要素を何らかの形で歪めたことが原因で正常な精神状態が保てなくなって破滅している。そして Camelot の社会も Arthur 王が理性のみを追求したことで、王妃の官能の力に屈服するのである。そういう神経症状が当時の文学作品の中に並んでいるのは、極度な倫理で自我を抑圧した Victoria 朝の社会背景に原因があると考えられる。建前として健全な文化社会を旨とし、また、それを掌中に収めたと思っていた当時の人々の心の奥では反動が鬱積し、それが嵩じて言語表現にまで極度に敏感になるという神経症になった。そして反動が歪んだ形で解放される世紀末の頹廢へと進んでいった。

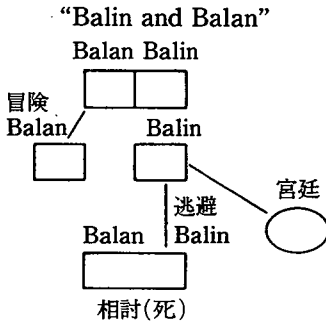
Lucretius は自己の内部に巣くう官能性を一切認めない為は無意識からの反動を受けた。また Jekyll 博士は人間性に潜む二つの要素を自覚して次のように語る。

... I thus drew steadily nearer to that truth by whose partial discovery I have been doomed to such a dreadful shipwreck: that man is not truly one, but truly two.<sup>6)</sup>

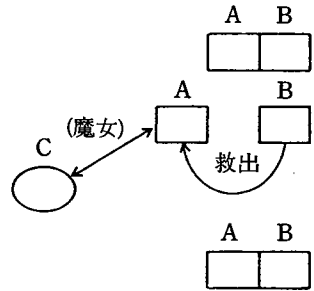
しかし、その真実を悟ったものの、薬の力で反動を解放して葛藤から逃避するという過ちを犯した結果、破局を迎える。Dorian も道徳に縛り上げられた理性の抑圧への反動が一旦は勝ち、自由奔放に振舞うが、永久に葛藤を断とうとして影の部分の抹殺を試みた瞬間反動の逆襲を受けて敗北する。これは、本来ならば相反する二者が葛藤を繰り返しながら均衡を保っていくところ、二者を分離し、一方を排斥したゆえに生じた悲劇である。官能と理性の共存とそれに伴う葛藤を認めないのは悪名高い Victorian morality の為せる業であった。そして過度の反動が上記のような破局を生んだのである。 *Idylls of the King* に対する Tennyson の姿勢も、王妃の姦通を殊更大写しにして弾劾するという神経症に陥っている。それが Tennyson の意図に反して、かえって王妃の官能を引き立たせているのである。

## III

最後に、“Balin and Balan”の構造と Balin が対面した Camelot の宮廷について整理してみよう。Balin と Balan の物語は丁度おとぎ話の裏返しになっていたが、それを図式化すると次のようになる。



おとぎ話 (「黄金の子どもたち」)



この二つの図を比べてみると、鏡像の関係にあることがわかる。happy-ending を迎える代わりに“Balin and Balan”は死によって話が終わっており、おとぎ話の陰画になっているのである。このような裏返しの現象が起きた理由として、Balin の対面した Camelot の宮廷社会の墮落を挙げてきた。Balin は野蛮性を抑えようとして Arthur 王の宮廷に入った。ところが、その宮廷は実は官能の毒に冒された病める社会であった。その為 Balin は自己の成長を阻まれて破滅する。

W. E. Buckler は、Tennyson における狂気の研究の中で、Balin と Balan はドッペルゲンガー現象であって、物語全体の混沌性を強めており、Balin は Tennyson の想像力の内に隠れている野蛮さだと指摘している。<sup>7)</sup>Balin の暴力は自らを破壊せずにはおかない。また J. H. Buckley に言わせると、この物語集は社会の衰退する様子を辛辣に描いたものだといひ、続けて次のように述べている。

The *Idylls* analyzes at length the forces of decadence that undermine the city-state: the failure of idealism, the substitution of self-interest

for civic virtue, the decay of manners, the surrender of reason to sensuality.<sup>8)</sup>

確かに Arthur 王に代表される理性は王妃の官能に圧倒されている。そこへ足を踏み入れた Balin は犠牲者となり、再び Balan と融合するためには暴力による死という手段しか残されていなかったのである。そして Balin の死も Camelot 没落の歯車の一つとなっていく。“Balin and Balan” は Arthur 王物語のシリーズ最後にかかれたのであるが、大作のしめくりとして注ぎ込んだ Tennyson の意図は図らずも逆の効果を生み出した。即ち、官能性を厳しく批判したつもりが、かえって当時の社会の欺瞞を暴きたてた鏡像の世界を我々に見せてくれるのである。

## 注

\*本文中の Tennyson の詩の引用は *The Poems of Tennyson* ed., C. Ricks (London: Longmans, Green and Co. Ltd. 1969) に拠る。

- 1) Hallam Tennyson, *Alfred Lord Tennyson: A Memoir by his Son* (New York: Greenwood Press, 1969), Vol. II, 134-141.
- 2) Thomas Malory, *Le Morte d'Arthur* (London: Everyman's Library, 1906), Vol. I, 67.
- 3) ここで使われている影という言葉は、補償をなすものという意味である。
- 4) Robert Louis Stevenson, *The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde* (Harmondsworth: Penguin Books, 1886), p.82.
- 5) Sigmund Freud, “Civilization and its Discontents” in *The Complete Psychological Works of Sigmund Freud* trans., J. Strachey (Toronto: Hogarth Press, 1961), Vol. XXI, 87.
- 6) *Jekyll and Hyde*, p. 82.
- 7) W. E. Buckler, *The Victorian Imagination* (New York University Press, 1980), p. 78.
- 8) J. H. Buckley, *The Triumph of Time* (Massachusetts: The Belknap Press of Harvard University Press, 1966), p. 74.